



20周年記念 特別展第一弾 「リードオルガンがくれた幸せ」



5月2日（土）から特別展「リードオルガンがくれた幸せ～近代日本の洋楽と学校教育と浜松～」が始まりました。世界に誇る浜松の洋楽器産業とそのルーツ、幕末開国以降、近代日本がとり入れた西洋文化と西洋音楽、また学制による西洋音楽教育に焦点を当て、中心的な楽器であった足踏み式のリードオルガンが果たした役割について紹介しています。2009年に開催された企画展「リードオルガンという文化～日本が洋楽と出逢った時～」の続編となっています。

浜松の楽器産業は、当時小学校で使われていた足踏み式リードオルガンの国産化がルーツです。「明治20年に浜松尋常小学校（現在の浜松市立元城小学校）のアメリカ製リードオルガンを山葉寅楠（やまはとらくす 1852～1916）が修理したのを機に寅楠がオルガン製造を始めた」という物語がよく知られていますが、当時の資料の最新の研究によれば、それ以前から寅楠はオルガン製造をしていたことがわかっています。また特別展を見られた多くの方はヤマハの名前は創業者の名前であることに驚かれます。

足踏み式リードオルガンは東京の才田光則や横浜の西川虎吉が寅楠よりも早く製作しています。他にも製作者がいて、当時、多くの日本人が国産リードオルガンの製作と販売普及を試みていました。

それは、キリスト教会での使用や、義務教育の学校での唱歌の授業で使うためでした。輸入品のオルガンは大変高価でしたので、日本中の学校に普及させるためには、低価格で質の良い国産品が必要だったのです。

学校での唱歌の授業ですが、これこそが、今の日本の西洋音楽を嗜む人々のルーツでありますし、学んだ唱歌は、いまや西洋音楽というよりも、日本人の心の原点にもなっています。日本人誰もが歌える岡野貞一の「故郷」は日本の音楽作品の誇りと言ってもいいでしょうし、滝廉太郎の「花」「荒城の月」、山田耕筰の「赤とんぼ」などは、世界に誇れる作品です。

庶民にとっては、学校でオルガンの伴奏で歌う唱歌の時間は、幸せな時間であったことでしょう。また、教室の中だけではなく、戸外で、運動会で、オルガンの伴奏で踊るお遊戯や踊りの時間も、幸せな時間であったことでしょう。展覧会では、当時の運動会の絵葉書を多く展示していますが、子どもたちの表情は、本当に嬉しそうです。

ところで、このような素晴らしい歌を作った音楽家たちはどのようにして日本で勉強をしたのでしょうか。彼らのほとんどはクリスチャンで、賛美歌に親しみ、オルガンを聴いて育ちました。そして自らもオルガンをひきました。ピアノはまだ数が少なく、彼らが親しんだのはリードオルガンでした。オルガンこそが、音楽家や、庶民に西洋音楽の世界を開いたのです。

ピアノも、トランペットも、ヴァイオリンも、電子オルガンもシンセサイザーも、素晴らしい楽器ですが、ちょっと昔の足踏み式リードオルガンに目を向けてみましょう。そこには、日本の近代西洋音楽シーンの原点、原風景があるのです。

第168回 レクチャーコンサート〈フォルテピアノとその時代 第2回〉
「ノクターンの誘惑～フィールドとショパン～」



日 時：平成 27 年 4 月 22 日（水） 19:00 ～ 20:45
会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：羽賀美歩
入場者：72 人

楽器博物館 CD「可愛いナンシー」のリリースに合わせて、18 世紀のギター音楽を楽しむコンサートを開催しました。演奏は竹内太郎さん、そしてゲストにバロックダンスの市瀬陽子さんをお迎えしました。

使用した楽器は竹内さんのバロックギターと当館所蔵のバロックギター、イングリッシュギター（2 台）、そしてサブライズでハープリュートの合わせて 5 台です。バロックギターは現代のギターと違い、ガット弦（羊などの動物の腸でできた弦）を使用しますので、張力が弱く、指で軽く触れるだけで柔らかな音色が響きます。イングリッシュギターは細い金属の弦が張られ、バロックギターと同じく指ではじきます。イングリッシュギターには付属の鍵盤を取り付けての演奏もしていただきました。その音はまるでフォルテピアノのような優しい音色がしました。

ギターの伴奏に合わせて、メヌエットやガヴォットなどをバロック期の衣装をまとった市瀬さんが優雅に踊ります。ダンスが貴族にとってのたしなみだったことや、ステップについてお話していただき、最後にはお客様と手をつないでダンスを楽しみました。

ワークショップ
「気分はメヌエット～バロックとルネサンスのダンス入門～」



日 時：平成 27 年 5 月 16 日（土） 18:30 ～ 21:00
会 場：楽器博物館 天空ホール
講 師：市瀬陽子、竹内太郎
参加者：23 人

今年は、開館 20 周年を記念したレクチャーコンサート「フォルテピアノとその時代」(全 6 回)を開催しています。第 2 回は羽賀美歩さんをお迎えし、「ノクターンの誘惑～フィールドとショパン～」を行いました。「ノクターン」というとショパンのイメージが強いのですが、フィールドという作曲家も忘れてはいけません。ショパンはフィールドを称賛し、弟子たちにもフィールドの作品を勉強させていたようです。ショパン作曲「ノクターン第 1 番作品 9-1」、フィールド作曲「ノクターン第 4 番」など二人の作曲家の作品を中心に演奏していただきました。また、ショパンの楽譜には、歌うようにという意味を持つ cantabile とよく書かれていて、「歌」にこだわって作曲していたことがうかがえます。羽賀さんは「ピアノで歌う」ということはただ心をこめるのではなく、「歌っているよう聞こえるように弾くテクニックである」とお話をされたのが印象的でした。

今回使用したのは当館所蔵のプレイエル社のフォルテピアノ（1830 年、パリ）。当時のピアノを使用することで、ノクターンの美しい旋律がより鮮明に感じられるコンサートとなりました。

第169回 レクチャーコンサート
「可愛いナンシー：18 世紀のギター音楽」



日 時：平成 27 年 5 月 15 日（金） 19:00 ～ 21:00
会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：竹内太郎、市瀬陽子
入場者：47 人

レクチャーコンサートの翌日は市瀬陽子さんと竹内太郎さんを講師としてお迎えし、ダンスのワークショップを開催しました。バロックダンスとルネサンスダンスの入門編ということで、16 世紀から 18 世紀のダンスを教えていただきました。

まずは、全員で手を取り合って大きな円を作り、16 世紀のブランル、パヴァーヌ、ガイヤルドを踊りました。初めは左右にステップを踏むという簡単な動きでしたが、徐々にステップも難しくなっていきます。休憩を挟みながら、17～18 世紀のカントリーダンスとコントルダンス、そしてメヌエットとガヴォットを体験しました。バロック期の貴族たちにとってダンスは必須のたしなみで、娯楽であると同時に所作を身に付けるための基礎でもありました。この時代に完成された宮廷舞踊のスタイルが現代のバレエの原点になりました。ダンスや音楽についてのお話も交えながら、ワークショップは終盤を迎え、最後に舞踏会で男女ペアで踊られるメヌエットに挑戦しました。音楽は CD ではなく、竹内太郎さんによるバロックギターの生演奏です。当時の宮廷のサロンを思わせる、優雅で贅沢なひと時でした。

大盛況！！楽器博物館ミニコンサートを開催

スチールパン

スチールパン奏者の松井奈都子さん、巻田剛志さん、パーカッションの牧原亮介さんをお迎えしてスチールパンの音を楽しみました。スチールパンはトリニダード・トバゴという国の楽器で、ドラム缶の表面を叩いてへこませて作る楽器です。先端にゴムの付いたバチで叩くと明るい音色がします。「椰子の実」「A列車で行こう」「コーヒールンバ」などが演奏されました。ノリの良いリズムにのせられ、会場からは手拍子がおこりました。演奏後には体験で楽器を演奏させてもらったり、演奏者とお話をしたりと和やかな雰囲気のコンサートとなりました。

日 時：平成 27 年 4 月 29 日（水）14:00、15:30（各 30 分） 会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：松井奈都子、巻田剛志、牧原亮介 入場者：141 人



薩摩琵琶

この日は薩摩琵琶のデュエットで、水島結子さんと後藤幸浩さんをお迎えし、平家物語の一部やオリジナル曲など数曲を語りつきで演奏していただきました。琵琶の音は日本人の心をつかむ音色で、多くのお客様が真剣に聴き入っていました。また、マイクを使わなくとも充分に通る独特な声が印象的でした。薩摩琵琶といっても種類は様々で、水島さんは 5 本の弦に 5 つの柱（フレット）があるのに対し、後藤さんの楽器は 4 弦、4 柱でした。歴史や使われ方の違いなど興味深いお話も聞くことができました。

日 時：平成 27 年 5 月 3 日（日）14:00、15:30（各 30 分） 会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：琵琶デュオ（水島結子、後藤幸浩） 入場者：231 人



電子楽器 オンド・マルトノ

オンド・マルトノという電子楽器の演奏を坪内浩文さん、ピアノ伴奏を市橋あゆみさんに演奏していただきました。オンド・マルトノはフランスで発明された楽器で、日本の演奏者はとても少ないそうです。不思議な形をしたスピーカーを 2 つ使い、耳によく響く澄んだ音色や、弦を強くこするよう強い音など、様々な音を表現することができます。ドビュッシー作曲の「月の光」やミヨー作曲「オンド・マルトノのための組曲よりエチュード」などが演奏されました。また、オンド・マルトノの原理を使った体験用の楽器も用意して下さり、終演後はお子さんから大人まで楽しそうに体験していました。

日 時：平成 27 年 5 月 4 日（月）14:00、15:30（各 30 分） 会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：坪内浩文、市橋あゆみ 入場者：320 人



電子楽器 テルミン & マトリヨミン

竹内正実さんとマトリヨミンアンサンブル“Mable” & “Da”の皆さんにテルミンとマトリヨミンの演奏をしていただきました。「テルミン」は 1920 年頃にロシアで発明された電子楽器です。そしてロシアのマトリョーシカという人形のなかにテルミンの原理を入れたものが「マトリヨミン」です。このマトリヨミンを考え出したのが竹内正実さん。テルミンの魅力を多くの人に知ってもらおうと開発されました。楽器に触れることなく音を出すこれらの楽器は弦楽器のような、人の声のような魅惑的な音がします。日本は世界的にもこの楽器を演奏する人が多いそうです。総勢 23 名でのマトリヨミンアンサンブルは日本だからこそ聴ける演奏なのかもしれません。

日 時：平成 27 年 5 月 5 日（火）14:00、15:30（各 30 分） 会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：竹内正実、“Mable” & “Da” 入場者：220 人



楽器博物館コレクションシリーズ CD No. 51. 52 新発売！！



最新 CD アルバムを 2 点ご紹介します。No.51 は 18 世紀のギター音楽です。バロックギターとイングリッシュギターは、それぞれ充実したソロのレパートリーがありますが、声楽の伴奏楽器としても活躍しました。この CD ではソロ、アンサンブル、声楽付きと 18 世紀のギター音楽の魅力すべて詰め込んでいます。鍵盤付イングリッシュギターは世界初録音。演奏：竹内太郎（バロックギター / イングリッシュギター）、野々下由香里（ソプラノ）、大塚直哉（チェンバロ）、井上景（第 2 イングリッシュギター）
【朝日新聞推薦、レコード芸術準特選】

No.52 はスクエアピアノです。18 世紀後半から 19 世紀にかけてのイギリスで、中産階級の家で愉しんだスクエアピアノ。ハイドン、クレメンティ、モーツァルトなどの作品を温かな演奏でお楽しみください。演奏：小倉貴久子（スクエアピアノ）、桐山建志（ヴァイオリン）、野々下由香里（ソプラノ）
【朝日新聞推薦、読売新聞推薦、レコード芸術推薦】

日本の魅力再発見!! 日本の雅楽 その⑤ 寺社の舞楽と聖霊会

雅楽は現在では、愛好者や団体も多く、ホールで行われる公演もあります。しかし、雅楽の中でも舞楽を観るのであれば、ぜひ一度、神社や寺院で伝統的に行われている屋外の舞楽を鑑賞してみましょう。舞楽は本来、屋外で演じられるものであり、舞台が常設されている寺社もあります。7月の当館20周年記念レクチャーコンサートで大阪からお招きする「聖霊会（しょうりょうえ）の舞楽」が行なわれる四天王寺もそのような寺院の一つです。では、寺社ではなぜ舞楽が演じられているのでしょうか。

神社では古くから祭祀において日本古来の歌や舞が奏されていました。外来音楽である舞楽はというと、神社では平安時代初期には行なわれておらず、朝廷の儀式や仏教儀礼にのみ用いられていたようです。それが平安時代後期になると、神仏習合によって神社の祭祀・祭礼が仏教の影響を受け、神社の祭祀にも外来の舞楽が行なわれるようになったと考えられています。室町時代には地方の神社にも広まり、雅楽や舞楽が演じられるようになります。江戸時代には幕府が雅楽を奨励し、明治時代には政府によって雅楽が神社の式楽として定められました。

一方、寺院での舞楽の歴史を紐解いてみると、古くは奈良時代の「大仏開眼供養会（752年）」において、外来の様々な音楽や舞が演じられたという記録が残っています。仏教では、極楽浄土には常に美しい音楽が鳴り響いているといわれ、音楽や舞を奏することが供養につながると考えられたことから、早い時期から法要で舞楽が演じられていました。また、仏教音楽には「声明（しょうみょう）」という、僧侶が経典に節をつけてうたう声楽があります。「唄（ばい）・散華（さんげ）・梵音（ぼんのん）・錫杖（しゃくじょう）」の四種の声明と作法を行う法要は「四箇（しか）法要」と呼ばれ、この法要に雅楽の奏楽や舞楽が組み合わされたものが「舞楽四箇（しか）法要」であり、正式な仏教儀礼とされました。平安時代中期になると、仏教が貴族社会へ浸透し、氏寺が建立され、このような大規模な法要が多く行なわれるようになります。

この頃は末法思想が広がった時代でもあり、盛大で華やかな舞楽法要は貴族たちに憧れの極楽浄土の世界を想像させたのです。

舞楽四箇法要は残念ながら現在ではあまり行なわれていません。四天王寺の「聖霊会舞楽大法要」は、少なくとも平安時代初め頃から始まったと考えられ、現在まで受け継がれてきた貴重な舞楽四箇法要です。四天王寺を建立した聖徳太子の御霊をお慰めするための法要で、現在では毎年4月22日の昼過ぎから夕方まで約5時間かけて行われます。境内の石舞台、真っ赤な曼珠沙華の飾りの下で鮮やかに演じられる舞楽や鳴り響く奏楽は、日常とは別世界であり、千年前の人々が見た景色と変わりません。

7月の浜松上演は、四天王寺で観る実際の法要にはありませんが、聖霊会のエッセンスをそのままに、舞楽だけでなく、僧侶による声明や雅楽の奏楽など、すべてが一体となって進んでいく法要の雰囲気を感じることができるステージになることでしょう。「雅楽」という文化の魅力が詰まった上演をぜひお楽しみください。



博物館日誌

- 4/11 (土) ~ 12 (日) 楽器博物館 20周年記念 先着 100名様 オリジナルグッズ配付
- 4/11 (土) シリーズ音楽の広場「アングルをひこう」14:00 天空ホール
出演：当館職員、ゲスト：浜松市「福」市長「出世大名家康くん」 入場者：53人
- 4/12 (日) シリーズ音楽の広場「アングルをひこう」14:00 天空ホール
出演：当館職員、ゲスト：浜松市「福」市長「出世大名家康くん」 入場者：47人
- 4/22 (水) レクチャーコンサート＜フォルテピアノとその時代 第2回＞
「ノクターンの誘惑～フィールドとショパン～」19:00 天空ホール
出演：羽賀美歩 入場者：72人
- 4/29 (水) シリーズ音楽の広場「スチールパン」14:00、15:30
出演：松井奈都子、巻田剛志、牧原亮介 入場者：141人
- 5/2 (土) 特別展 20周年記念
「リードオルガンがくれた幸せ～近代日本の洋楽と学校教育と浜松～」開催
- 5/3 (日) ミュージアムサロン「随摩琵琶」14:00、15:30 天空ホール
出演：琵琶デュオ（水島結子、後藤幸浩） 入場者：231人
- 5/4 (月) ミュージアムサロン「電子楽器“オンド・マルトノ”」14:00、15:30 天空ホール
出演：坪内浩文、市橋あゆみ 入場者：320人
- 5/5 (火) ミュージアムサロン「電子楽器“テルミン&マトリヨミン”」14:00、15:30 天空ホール 出演：竹内正美、Madd&Da 入場者：220人
- 5/15 (金) レクチャーコンサート「可愛いサンシー：18世紀のギター音楽」19:00 天空ホール 出演：竹内太郎、市瀬陽子 入場者：47人
- 5/16 (土) ワークショップ「気分はメヌエット～パロッドとルネサンスのダンス入門～」 天空ホール 講師：市瀬陽子、竹内太郎 受講者：23人
- 5/18 (月) ~ 22 (金) 移動楽器博物館 浜松市立飯田小学校

これからの催し物

- 展示室ガイドツアー 毎日曜日 展示品の解説 ※催し物により変更もあります
- ギャラリートーク 毎日数回 展示品の解説を行います
- 特別展 5/2 (土) ~ 6/14 (日)
20周年記念「リードオルガンがくれた幸せ～近代日本の洋楽と学校教育と浜松～」
- 日本リードオルガン協会 20周年記念・浜松大会「足踏みオルガン昨日・今日、そして明日へ」
公開講座「山葉オルガン創業の頃」6/13 (土) 10:00 研修交流センター
講師：武石みどり
公開演奏会「リードオルガン・浜松からのメッセージ」
6/13 (土) 13:30 音楽工房ホール
出演：上畑正和、伊藤園子、中村証二、鈴木開、エヴァルト・ヘンゼラー、大津磨由美、鈴木重子、名倉亜矢子
- レクチャーコンサート
「甦る唐代琵琶譜の音楽～古代シルクロード敦煌から正倉院へ～」
5/24 (日) 15:00 音楽工房ホール 出演：スティーヴン・G・ネルソン、伶楽舎
＜フォルテピアノとその時代 第3回＞「奏でる喜びをともに～エラルドピアノと人生の煌めき～」
5/27 (水) 19:00 天空ホール 出演：荒川智美、山澤慧
＜フォルテピアノとその時代 第4回＞「情熱と矜りのフォルテピアノ～イタリア・スペインの遺産から～」
6/10 (水) 19:00 天空ホール 出演：川口成彦

浜松市楽器博物館だより

平成 27 年 5 月 23 日発行 No. 101 編集 浜松市楽器博物館
〒430-7790 浜松市中区中央 3-9-1 TEL 053-451-1128 FAX 053-451-1129
URL <http://www.gakkihaku.jp/>